

I-B-19 てんかん性脳波のLateralityと WAIS ——器質性損傷群との比較

福島県立医科大学 神経精神科

○小野 常夫, 石下 恭子 管 るみ子
増渕 洋 高橋 志雄 熊代 永

〈目的〉第14回本学会で、てんかん患者の異常脳波の lateralityとWAISの関係を検討し、その結果としては てんかん性脳波が右にみられた群の60%では、WAIS 検査にて、言語性IQが動作性IQより低かった事を 報告した。今回、我々はWAISの言語性IQ及び動作 性IQの各項目について、lateralityが右の群と、左 の群と、認められない群の3群を比較し、更に非てん かん性の器質性損傷群との比較も行ったので報告する。
〈対象と方法〉当科てんかん外来へ通院中の部分てん かん患者37名（異常脳波局在が右にある患者15名、左 にある者15名、局在に左右差の認められない者7名） である。一方、器質性損傷群は損傷部位が明らかでか つ失語症状を伴わない例46名（右半球損傷34名、左 半球損傷12名）である。これら全例にWAIS成人知能 検査診断法を試み、比較検討した。

〈結果〉てんかん患者の言語性IQは、lateralityの 認められる群では右の群も左の群も類似したプロフィ ールを示し、ともに単語問題の得点が低かった。しかし、 lateralityの認められない群では単語問題は他の項目 と差はなかった。次に言語性IQと動作性IQを比較 してみると、lateralityの右の者は言語性IQが動作 性IQより低かったが、lateralityの左の者や認めら れない者では差はなかった。一方、器質性損傷群では、 言語性IQは右の群も左の群も類似したプロフィールを 示したが、単語問題ばかりでなく類似問題も低く、て んかん患者の結果とは異っていた。また、言語性IQ が、動作性IQより劣ることはなく、右半球損傷者で はむしろ言語性IQが動作性IQより高かった。

〈結論〉てんかん患者の脳波 lateralityについては、 lateralityの認められる者と、認められない者の間に、 更にlateralityの右の者と左の者との間に、夫々WAIS 得点差が認められ、これらは器質性損傷群のWAISスコ アとも異っていた。

I-B-20 側頭葉てんかんの神経心理学的 研究

東京大学医学部精神医学教室

増井寛治、丹羽真一、安西信雄、亀山知道、斎藤治、 栗田広、宮内勝、浅井歳之、池淵恵美、神保真也

側頭葉てんかん（以下TLEと略）では、他の型の てんかんに比し、てんかん性性格変化や精神病症状を 伴うことが多く、このことと発作波焦点部位の特殊性 とに関連があると推測されている。この推測を検証す るためには、辺縁系諸核や側頭葉皮質に発作波焦点が あることがTLE患者の認知機能に何らかの影響を及 ぼすか否かを検討することが必要と考えられる。そこ で、TLE患者に各種心理・神経心理学的検査を施行 し、その結果を発作波焦点部位の左右性との関連で考 察した。

〔対象〕 東大病院精神科に通院中のTLE患者24名 （14歳～49歳）を対象とした。主な焦点部位による 内訳は、右側焦点10名、左側焦点10名、両側焦点4名 である。対象者は全て右利きである。

〔方法〕 心理検査として、WAIS、Benton 視覚記銘 検査、東大脳研式記銘力テストを施行した。神経心理 学的検査として、CVシラブルまたはFM音を目標と したdichotic detection課題、およびtachistoscope を使用して右または左視野にひら仮名二文字の有意味 単語を呈示し、直後と15分後に呈示された単語を答える recognition課題を施行した。

〔結果〕 ①Benton 視覚記銘検査で、平均誤謬数は右 焦点群の方が左焦点群より多かった。②tachistoscope を用いたverbal recognition課題で“15分後”の場 合、左焦点群が右焦点群よりも右視野に呈示された単 語の正答数が少なかった。

〔考察〕 上記の結果は、左半球は言語的記憶に関与し、 右半球は図形的記憶に関与するというMilnerの説を 支持するものであり、記憶機能と深く関連すると考え られる辺縁系・側頭葉に発作波焦点が存在することが、 TLEの記憶機能に障害を与えていることが推測され る。なお、正常対照群との比較検討の結果を含めて発 表する予定である。